

TOK (知の理論) /EE (課題論文) /CAS (創造性・活動・奉仕)

DPのコア科目について

DPのコア科目とは、DPの中心となる科目でありこれらを修得しなければ、一般科目として設定されているグループ1～6の成績が充分であったとしてもディプロマの資格を得ることができません。学術的な学びの深みと、地球に生きる一人の人間として社会とどのようにかかわって自分は生きるのか、そして、他と共生するのかということの思考し、実際に活動することがこの3つのコア科目の醍醐味であり、最も重視されている理由です。DP資格を取得するための6つの一般科目の外部試験は10月末から11月中旬の約3週間の日程で世界統一試験として開催されますが、それらの学びのコア=核としてTOK、EE、CASがあり、これらに関しては、エッセイ等の成果物や作品、活動の記録が国際バカロレア機構に提出され、厳正に審査されます。

TOK (知の理論)

「知る」とはいったいどのような行為でしょうか。また、「知識」や「知性」とは、何を指すのでしょうか。

“Theory of Knowledge” (以下 TOK) は、“知ることを知る”ための授業です。TOKは、DPのコアカリキュラムの一つでもあり、18か月をかけて、知の本質を学びます。TOKを核として、6つのグループをつなぎ、批判的思考力を養います。

TOKでは、“WOKs (知るための方法)”と呼ばれる知るための方法を学びました。WOKsには、言語、知覚、理性、感情、直観、記憶、想像、信仰の8つがあります。

TOKでは、どのような状況でどのように私たちがWOKsを用いているかを分析し、それを思考の手段として用いられるようになりました。

また、“AOKs (知識の領域)”として、自然科学、人間科学、数学、歴史、倫理、芸術、宗教的知識の体系、土着の知識の体系の8領域を学びました。一つの事象でも、それを切り取るAOKsを変えると、まったく別のものが見えてきます。それらが私たちの知識に対して果たす役割について、それぞれの領域の知識を比較し議論しました。

最終課題の一つとして「実社会の状況」から、「知識に関する問い」を抽出し、知ることについてのプレゼンテーションとして発表しました。「実社会の状況」は、あくまで物事の一側面をとらえたものにすぎません。WOKsやAOKsを活用し、「実社会の状況」の中に隠れている本質を探し出します。そして、そこから、自分自身の知識に関する問いを立てました。

次年度は、18か月の集大成として、IBから課されるエッセイに取り組み、「知る」ことについての探究を深めていきます。

EE (課題論文)

DPの学びの3つのコアのひとつ、Extended Essay (EE)は、DPの6領域の学びの中から特に深めたいテーマについて領域(科目)に軸足を置きながらも領域を超えた探究成果を論文という形式で提言する営みです。大雑把には「卒業論文」と捉えるとわかりやすいのですが、日々の探究と同時進行で研究していくところにも大きな特色があります。

DPの規定としては授業での位置づけを必須とはしておらず、あくまでも授業外の自主的な探究活動の位置づけですが、本校では敢えて5年次に1単位の学校設定科目として設定して週に1回50分学校での探究や交流できる時間を確保しています。

EEの取組の概略を説明します。5年次にDPの授業が始まってから、生徒はそれぞれの領域の課題探究を通して、自らの興味関心のより高いものを自由に選択し、5年次の夏にはテーマを各自で設定した上で、探究領域と指導教員(supervisor)を決めます。領域とsupervisorが決まれば、各自が設定したテーマに基づいて日々探究を積み重ねますが、supervisorとの公式の面談の回数が決められているため、その限られた面談に向けて「何を問うか」「どこまで何をやればよいか」を自分自身で考えます。なお、この面談は最終稿提出後の振り返りも含めて通算3回に限定されています。

生徒は自らが楽しいと思うテーマを設定したものの、実際には探究の営みがとても大変な様子が見取れますが、大変さを経るからこそ楽しみが深まることを、現時点で生徒は実感しているでしょう。限られた面談の様子を見ると、それが伝わります。目下、6年次の夏の最終提出に向けて、5年生の冬は初稿へ向けた取組をしている最中です。

CAS（創造性・活動・奉仕）

「…何かを信じているのであれば、単に考えたり話したり書いたりするだけではなく、行動しなければならない。」(ピーターソン, 2003)

CASは人間関係の中において、学びを強化し拡張するためのもので「創造性」「活動」「奉仕」という3つの要素で構成されてい

ます。コア科目の中でも教科外に位置され、生徒はこれまでの学習経験で育まれた自分の役割や個性を認識する機会となります。18ヶ月間にわたり（理想的には週1回のペースで）3つの要素をバランスよく取り組み合わせることで「自己決定」「他者との活動」「目標達成」を経験し内面と社会性の成長を促します。この経験は、自分で選択し、自らの経験として受け止め、楽しむことが重要となります。自分の得意・不得意、長所・短所を知ることは、職業感や進路に繋がるものだと考えます。生徒はCASを通して自己の将来を考える機会を得ることになります。

今年度の本校教育活動でも体育系部活動はActivityに、文化系部活動やユニット、委員会活動はCreativityやServiceとして行うことができますが、生徒との面談を通して気づいたことがありました。それは、CASの3つの要素のバランスは趣味や嗜好などの個性に顕著に現れるということです。東区社会福祉協議会、NPOへの繋がりやMYPにおけるSAの経験からServiceへの取り組みは馴染みがありますが、ActivityやCreativityでは、活動に苦慮する姿がありました。スポーツを日常的に取り組む生徒は創造的活動のイメージが湧きにくく、行動に移せなかつたりしました。音楽活動や行事の運営など文化的活動の興味が高く、経験がある生徒は身体的活動に躊躇する傾向がありました。

生徒は様々な経験に挑戦することで、新たな自分の側面を発見したり、強みを知ることになります。そして、大切なことは自分の行動を記録として残し、振り返ることです。「調査・準備・行動・振り返り」の入り連の流れををジャーナルに記録することで自らの経験を重ね成長することができます。

